

空海と四国遍路

寺 内 浩

1 空海の生涯

空海が生まれたのは774（宝亀5）年である。父は佐伯田公、母は阿刀氏の女。佐伯氏は讃岐国を代表する豪族である。場所は讃岐国多度郡、現在75番札所善通寺があるところが生誕地といわれている。善通は父佐伯田公の法名。善通寺は空海が帰国後唐の青龍寺を模して建立したもののだが、善通寺の境内からは奈良時代の瓦が出土しているので、元は佐伯氏の氏寺であったと思われる。

788（延暦7）年15才となった空海は、伊予親王の文学をつとめていた叔父の阿刀大足を頼って入京し、勉学の途に入った。そして、18才になると大学に入り、本格的な学究の徒となった。空海は漢詩文の分野でもすぐれた才能を発揮したことは周知の通りだが、その基礎はこの時期に築かれたのである。ところが、時期は不明だが、空海は一人の沙門に出会ったことにより、その人生が大きく変わることになる。空海の『三教指帰』には「ここに一の沙門有り、余に虚空蔵聞持の法を呈す」とある。これが契機となり、空海は大学を離れ、故郷の四国に帰って仏道修行の途に入る。当時は山林修行が盛んな時期であったが、空海もまた四国の各地で山林修行に励んだのである。そして、25才の時に大和国久米寺の東塔下で大日経を感得したという。

804（延暦23）年31才の時得度し、以後空海を名乗るようになる。従って、彼はそれまでは私度僧であった可能性が高い。空海はこの年の遣唐使で入唐する。長安に至った彼は青龍寺の僧惠果に師事し、密教を学んだ。2年後帰国した空海は、約3年間筑前観世音寺に滞在する。すぐに入京しなかった理由は不明だが、叔父の阿刀大足が文学をつとめていた伊予親王の謀反事件があるいは関係していたのかもしれない。809（大同4）年京に入った空海は高雄山寺（神護寺）に居を定める。翌年空海は嵯峨天皇に鎮護国家の修法を行うことを奏請する。そして、816（弘仁7）年には高野山を賜与される。こうした空海の中央における順調な活動にあたっては嵯峨天皇の後援が大きかった。しかし、空海が嵯峨天皇に知遇を得たのは、仏教者としてではなく漢詩文や書道にすぐれていた故であった。

821（弘仁12）年、空海は讃岐国満濃池築工のため築池別当となり、故郷に帰る。満濃池は以前からあった灌漑用溜め池だが、大がかりな修築が必要となったため、圧倒的な人望のあった空海が故郷に呼ばれ、工事の先頭に立つことになったのである。空海の登場により工事は順調に進み、程なく完成した。823（弘仁14）年には東寺（教王護国寺）が与えられ、京都における真言密教の道場となった。翌年には早魃のため神泉苑で請雨経法を修した。『今昔物語集』巻14-41によると、7日の修法を行うと黒雲がたちこめ雨が降り、空海の名声はさらに高まった。827（天長4）年には大僧都に任じられる。そして、835（承和2）年、空海は高野山で62才の生涯を終えた。弘法大師の諡号が贈られたのは921（延喜21）年のことである。

2 四国遍路の成立

一般的には四国遍路の創始者は空海であるとされており、これを疑う人はいない。51番札所の石手寺の縁起に見える衛門三郎伝説では9世紀の前期に彼が弘法大師を追って八十八ヶ所を巡拝したとある。しかし、歴史的にみれば八十八ヶ所の札所が確認できるのは中世末期になってからであり、それ以前の史料は見あたらない。ただ、四国の海岸線沿いを修行として歩くことは古くから行われていたようである。

『三教指帰』によると、大学を離れたのち四国に帰った空海は、阿波国の「大龍嶽」（21番札所太龍寺の近辺）、土佐国の「室戸崎」（室戸岬）、「石峯」（石鎚山）、「金巖」（金山出石寺か）で修行をしたという。当時は山林修行が流行しており、空海も四国の各地で修行に励んだものと思われる。しかし、場所が確認できるだけで具体的な修行方法は不明である。

『今昔物語集』巻31-14に次のような話がある。

今は昔、仏の道を行ひける僧三人ともなひて、四国の辺地と云ふは伊予・讃岐・阿波・土佐の海辺の廻りなり。その僧どもそこを廻りけるに、思ひかけず山に踏み入りにけり。（後略）

ここから、12世紀になると「四国の辺地」、すなわち「海辺の廻り」を仏道修行として歩くことが行われていたことが知られる。このことは『梁塵秘抄』の次の歌からもわかる。

我等が修行せし様は、忍辱袈裟をば肩に掛け、又笈を負ひ、衣は何時となく潮垂れて、四国の辺道をぞ常に踏む。

ここでも「四国の辺道をぞ常に踏む」ことが「修行」としてみえている。従って、平安時代の後期には四国の海岸線沿いを多くの修行者が廻り歩いていたことは確かである。しかし、廻るとあるだけなので札所はまだなかった可能性が強い。ただ、八十八ヶ所の札所が海岸線沿いに多くあることを考えれば、平安時代後期には「原遍路道」ともいうべきものは成立していたといえるのではないだろうか。遍路道の原型は成立していたが、札所はない時代、それが古代末期から中世初期の状況であろう。そして、そうした「原遍路道」を歩く修行者が増加するなかで、中世後期から八十八ヶ所の札所が置かれていったのではないだろうか。

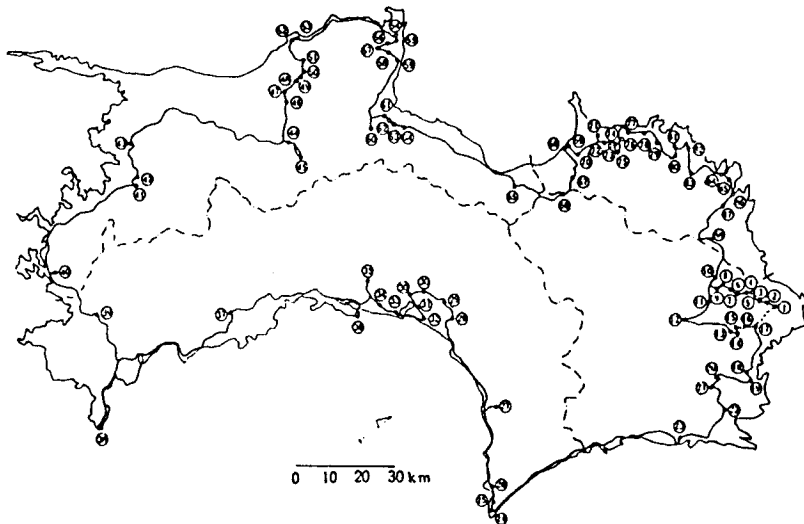
<参考文献>

『日本思想大系 空海』（岩波書店、1975年）

『愛媛県の地名』（平凡社、1980年）

『道の文化』（美巧社、1991年）

774年（1才）	讃岐国多度郡に生まれる。
788年（15才）	入京、叔父の阿刀大足に就いて勉学。
791年（18才）	大学に学ぶ。その後、四国各地で修行。
798年（25才）	大和久米寺東塔下で大日経を感得。
804年（31才）	得度して空海となる。 遣唐使の一員として入唐、長安に至る。
805年（32才）	青竜寺の僧恵果に師事、密教を学ぶ。
806年（33才）	帰国、筑前観世音寺に滞在。
809年（36才）	京都に入住、高雄山寺に居を定める。
810年（37才）	鎮護国家の修法を行うことを奏請。
816年（43才）	高野山を下賜される。
821年（48才）	築池別当として讃岐満濃池の堤を築工。
823年（50才）	東寺を給預され、密教道場とする。
824年（51才）	干魘のため神泉苑にて請雨経法を修す。
827年（54才）	大僧都に任ぜられる。
835年（62才）	高野山にて入滅。
921年	弘法大師の諡号を贈られる。



遍路道と札所

貞享《1684~1688》のころの遍路道